

佐藤優・
鈴木宗男事件の
教訓

情報機関を 「権力の罠」から遠ざけよ

権力とインテリジェンスの接近が生んだ悲劇。それが、佐藤優・鈴木宗男事件の核心だ。
この苦い教訓をかみしめよ。でなければ、国家は舵取りを過ちかねない

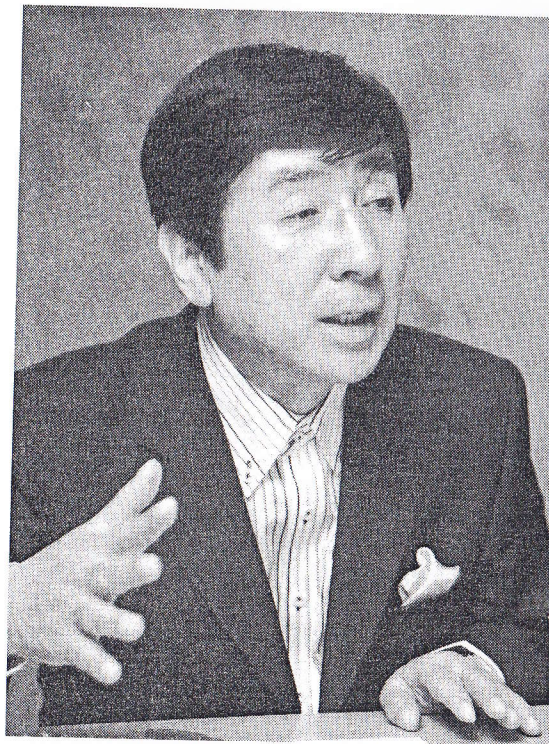
対談 ● 佐藤 優 / 起訴休職外務事務官・作家×手嶋龍一 / 外交ジャーナリスト・作家



さとうまさる 英国の陸軍語学学校でロシア語を学び、在ロシア日本大使館に勤務。モスクワ国立大学哲学部で弁証法神学を講義した。2002年背任と偽計業務妨害容疑で逮捕され、現在起訴休職中。この逮捕劇を「国策捜査」として分析した『国家の罠』が話題に。『自壊する帝国』で大宅賞を受賞。

情報部門と政策部門は区分せよ

手嶋 「ヨーロッパに共産主義という亡霊が徘徊している」とは、マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』にある有名な一節ですが、最近、「東京にはインテリジェンスという名の妖怪が徘徊している」といっていい奇観を呈しています。政府首脳、財界人、それに学者まで、みな憑かれたようにインテリジェンスを語り始めました。とりわ



てしまりゆういち 1997年から2005年までNHKワシントン支局長を務める。05年6月に独立し、上梓した小説『ウルトラ・ダラー』がベストセラーに。近著に『ライオンと蜘蛛の巣』のほか、佐藤優氏との対論を載せた『インテリジェンス 武器なき戦争』がある。

場します。

「政府の情報機能を強化することにより、より多くの質の高い情報を収集し、それらに高度の分析を加え、適正な政策判断を支えていくことが必要だ」

国家の最高指導者にとって「適正な政策判断」とは、人様から支えてもらうようなものじゃないのです。

佐藤 そこで、アウトですね。インテリジェンス機関は、政策決定権から区分し、客観的な情報分析に取り組みめるように整備すべきです。前提として「政策判断を支え」てはならない。

この中間報告にも「政策と情報の分離」というタイトルのくだりがあるので問題意識はあるのでしょう。しかし、中身は、「情報部門においては、政策部門の情報関心に基づいて、情報を収集し、収集された情報の集約・分析を行い、その成果を政策部門に提供す」とある。要するに、政治側の関心に基づいて情報を報告することです。具体的な政策を知って、それに

府自ら筆を執った重要文書にくつきりと姿を表しています。

政府は今、日本版のNSC（国家安全保障会議）の創設を目指して、今国会に改正法案を提出しています。そして、首相官邸の情報収集・分析能力を高めようと、「情報機能強化検討会議」（議長・塩崎恭久官房長官）を発足させ、二月末に中間報告を取りまとめました。この報告の冒頭部分に奇妙な一節が登

け政治家は、決定的なインテリジェンスさえ手にできれば、誤りなき政治決断ができると錯覚してしまった節がある。これは幻想といわざるをえません。佐藤 同感です。適正な政策判断をするのは、あくまでも政治の仕事であって、いくら良質な情報を収集し、提出しようとも、それは判断のための材料でしかありません。何かがズレている。手嶋 こうした未熟な問題意識は、政

あわせて情報を取ることにもなりかねない。危険極まりない。

手嶋 ついこの間、世界はその危険を目の当たりにしたばかりです。イラクのサダム・フセイン政権は、大量破壊兵器を持っているに違いない——アメリカの情報当局は、政権首脳部の情報関心に沿って、インテリジェンスを集約・分析し、その果てに悲劇は起きたのです。

佐藤 残念ながら、失敗例の教訓から学ばれることはあまりありません。

手嶋 この中間報告は、政策当局者が「われらの関心はここにあり」とインテリジェンス機関に伝える必要性を指摘しているらしい。しかし、政治指導者は、自らの胸のうちを決して覗かせてはならないのです。どんなに自制が利いた情報士・士官でも、政治家が欲している結論に應えるインテリジェンスを報告してしまいがちなものです。佐藤 それこそが、第二の佐藤優事件を引き起こしかねない。僕がロシア政

策をめぐり、背任容疑で逮捕、起訴された理由は、政治と近づきすぎたことにあるのですから。

情報部門と権力は、分離してはならないけれど、明確に区別しなければならぬのです。

手嶋 「区分スレドモ分離セズ」。重要なテーゼです。佐藤さんは、五十二日の試練を経て、やはり変わりましたね。ラスプーチンの教訓をこんな形で率直に語るようになったとは。事件の嵐を潜りぬけて初めて真のインテリジェンス・オフィサーになった、と僕がいつているのはまさにこのことです。

佐藤優事件こそが教訓

手嶋 凍りついた日露関係を打開し、北方領土問題を解決したい。そして国際的舞台上で日本の戦略的な立場を揺るぎないものになりたい——情報士官にして外交官でもある佐藤ラスプーチンは、こう考えて行動した。

ラスプーチンのこうした二つの顔が、

問題を錯綜させてしまったのです。インテリジェンス・オフィサーとして、情報を収集・分析する職責にありながら、外交官としては、対露外交の政策立案にも深く関与していた。二つの分野に一人の組織人が手を染めることは、情報の原則に照らせば禁じ手です。

ただ、日本には本格的な対外情報機関など存在しない。そこでラスプーチンは、自分で情報を取って政治家に提示し、自分が正しいと信じる方向に国家を誘導していった。監督を巧みに操ってサインを出させ、その変化球を自分で打ち返していたのです。

情報機関もなく、インテリジェンスの原則もなく、人材もない。こうした三無主義の国家に生を享けたことにラスプーチンの悲運はあったのです。

佐藤 五十二日間も檻の中に入れられ、そして、今、振り返っても、あの時、僕には他の選択肢はなかったと思っています。まさしく『他策ナカリシラゼント欲ス』だったのです。とはいえ、

僕の事例は完全な失敗例です。

一つには、あの時、北方領土は取り返すチャンスが確かにあった。それができなかった。

もう一つは、僕が逮捕されたことにより、当時、対ロシア外交に尽力していたスタッフが、どこから情報を取っていたか、どんな人脈があったかなどをマスコミに話した外務省幹部がいて、その後、スタッフがまるで使い物にならなくなってしまったことです。

そのうえ、逮捕劇の悪夢があるから、せっかく我々が築いたロシア側の人脈にも外務省のスタッフがアクセスしなくなってしまった。脈々と作り上げてきたものがほとんどダメになってしまったのです。この轍を踏んではいけない。だから、政策部門と情報部門は分けなければいけないと実感をこめていうのです。

手嶋 自らを戯画化し、冷たく突き放してわが身を語る。ジョン・ル・カレが世に送り出した伝説のスパイ、ジョ

ージ・スマイリーのような大人の振る舞いで、好ましい。このスパイ・マスナーのように腹が突き出てきたところを含めて、最近の佐藤ラスプーチンには読みが加わってきました。

佐藤 もう少し生活に余裕が出てくれば、減量を真剣に考えるのですが。今は書くことが面白いので、そこまで知恵が回りません。(笑)

手嶋 ブッシュ政権は、イラクのサダム・フセイン政権が国際テロ組織アル・カイダと水面下で連携していると疑った。イラク戦争前、米国の中央情報局(CIA)は、フセイン政権とアル・カイダの関係を裏付ける証拠を挙げなかったのですが、政権内の強硬派の圧力に流されて、結局、CIAはイラクへの武力行使を正当化するインテリジェンスに傾いていきました。

佐藤 そうです。アル・カイダを率いるビンラーディンとフセインは完全な敵対関係にあり、少しでもイスラム世界の素養のある人なら、大嘘と分かる。

けれど、政治による圧力は、時に、こんな具合に情報機関の分析を捻じ曲げるのです。

手嶋 自らの欲するインテリジェンスを提出するよう情報機関に強要する。これは、政治家の「業」といってもいいのです。

佐藤 これは初めて明かす話ですが、故・小渕恵三首相がロシアを訪問する際、「ロシアのことは佐藤優がよく知っている」ということで、名指しで「お前は、エリツインの医者を知っているか調べてこい。そのうえで、オレに直接報告しろ」と特命がきた。「それは、できるかもしれないけれど、ものすごく危険で、お金もかかりますよ」というと、「金は出す」というのです。事実、本当に二〇〇〇万円用意してくれました。さらに首脳会談でエリツインがどういった対応をするか事前に調べるのとまで命じられた。

手嶋 『中央公論』の読者にそこまで

明かしていいものでしょうか。
佐藤 エリツインさんが亡くなったから話すことにしました。あの時、僕には「できません」と言って、断る選択はなかった。

率直に言って、やりがいがあった面白い仕事でした。およそ官僚というのは、政策決定権のある人間に情報を活用され、感謝されればうれいものなのです。ただ、いずれにせよ、政治家は、情報を持っている人間を無理やり引きずり出して活用しようとするものです。だから、インテリジェンスの組織の扉を是非でも高くして、中にいる人間を見えなくしなければいけない。外国の情報機関の人間から見えないように、国内の政治家から見えないように、国内の政治家からも見えなくしなければいけない。でなければ、組織にいる人間が政治に巻き込まれて消耗してしまいますよ。

手嶋 情報と政治権力。情報士官は政治家との間合いをどう取っていくか——これは解かれることのない永遠の

設問なのです。内閣の中間報告でも「政策部門と情報部門は官邸首脳の下、別個独立の組織とし、政策と情報の分離を担保する」と述べています。その一方で「政策と情報の分離を前提として、政策判断に資する情報の提供を確保するためには、両者の有機的な連接が必要である」とも述べています。このあたりになると、起案者の論理も用語の選択も濁りに濁って意味不明になっていきます。「連携」よりもっと強い絆で結ばれているので「連接」なのだという解釈も出回っているようですが、まじめにとりあうのは時間の無駄というものです。

また、中間報告では、内閣情報調査室に「内閣情報分析官」を新設して、日本版NSCに提出する情報評価書を取りまとめさせると述べています。情報の収集・分析にあたる組織のトップが、評価の原案まで書くことになっていく。これはどう見えますか。

佐藤 そんな全知全能の人を想定して

いること自体が異常ですよ。おそらく、政治家の内在論理にも、対外情報収集の現場にも疎い官僚と研究者による作文だからこういう緊張感のない文書になるのです。こんな程度の心構えでは、政権と情報担当者の接近は不可避で、必然的に事故をおこすと思います。

対外情報庁をつくる怖さ

手嶋 現在の日本にも世界の情報機関に匹敵する業務は存在します。

たとえば、警備・公安は国内の防諜活動に努めていますし、レベルも相対的に高い。自衛隊による電波傍受も行われている。しかしながら、英国の秘密情報部(SIS)のように、国外に要員を配置して情報を収集する対外情報機関を持っています。一部で対外情報機関を創設せよという意見もありますが、可能だと思いますか。

佐藤 つくるかどうかは、首相が決定することなので、設置自体が不可能であるとは思いません。ただ、本当に実

効性のある機関にするためには、相当な努力が必要になるでしょう。

そして、対外情報機関を設置するということは、大変に恐ろしいことだということを描きしておきたい。今、日本には本格的な対外情報機関がないことで、世界のインテリジェンスのルールを大幅に踏み越えても「お目こぼし」してもらっているんですよ。

たとえば、日本の外務省は外国の研究者にカネを払って研究を委託して、その国の情報を調べた文書のファイルなどを平気で机の上に山積みになっているのです。こんなものは国際スタンダードからいえば立派なスパイ活動です。いつ、委託を受けた研究者がスパイ容疑で訴えられてもおかしくない。

しかし、将棋でいえば、日本は飛車角がない国であると



いう認識が世界にはある。桂馬がたまに前に進んだりもするが、「まあ、日本のすることだから」と許してもらっているのです。

けれど、対外情報機関を設置したらそうはいきませんよ。本格的に厳しい

インテリジェンスの世界に足を踏み入れることになり、国際スタンダードでのルールと掟を守らなくてはなりません。

手嶋 日本は対外情報機関の仕事についてそれほどシビアに考えていないのですね。

佐藤 そう思いますね。各国の対外情報機関には、お互いの国のスパイを通報しあう、業界用語でリエゾン(連絡係)と呼ばれる人がいるんですよ。リエゾンは組織の代表なので合法的なインテリジェンス活動にとどめるのですが、組織のスタッフには、当然ながら非合法のスパイ活動をする者もいます。そうした時に、まず、リエゾン同士で調整が行われる。

全く記録に残さないやり取りです。「お前の組織の人間が、わが国の将校の妻と不倫関係にあるようだ、あれは何だ。組織としてやっているのか。それとも個人的問題か。いずれにせよ手を引かないと消えてもらわざるをえ

なくなるぞ」と。そうすると、相手側も「それなら、こちらも一人消すぞ」と。そんなふうなことがあった後、裏でスパイの追放合戦が行われる。リエゾンの交渉で、歩留まりがどのくらいかを決めたりする。

手嶋 それほど苛烈な世界に踏み込む覚悟があるのでしょか。相手国の懐深くに浸透し、非合法な手段も辞さずにインテリジェンスに分け入っていくつもりがあるのでしょうかね。

佐藤 それに、中東の某情報大国あたりになると、情報局の人員の育成方法も生半可ではありません。まず、リクルートからすごい。「なりたい」と手を挙げた人間は絶対に採用しない。組織側から、「これは」と思う人物に接触を図り、適性がありそうだと思うたら、身上を徹底的に調べ上げる。そして、最後の試験というものがある。

採用対象者に「今日、深夜に身分証明書も何も持たずに官邸の横に来るよ。に。万が一、トラブルに巻き込まれ

た際には、情報局に連絡を取って、釈放してもらおうように」と命じておく。そして、警察には匿名で通報の電話をする。「今日、深夜、官邸にテロリストが出るという情報がある」と……。

手嶋 たまったものではありません。佐藤 「やらせ」ではないので、警察は本気です。そこで、どうやって切り抜けるかを見るんです。「合格者」の一人は双眼鏡を持っていた。で、警察に取り囲まれると、「野鳥の観察が趣味だ」と嘯き、フクロウなど鳥の種類をそれは詳細に説明してみせた。そして、「これは野鳥オタクだ」と警察を納得させて切り抜けた。胆力の試験です。これだけは天性のもので、学力試験では決して測ることができないのです。

手嶋 警察に捕まるとどうなるのですか。

佐藤 一応、人権が守られているという建前になっているのですが、テロやスパイ活動の容疑者はかなり「自由

な」取り調べを受ける。ここで、情報局の名前を出したら不合格。そのまま檻の中に入れられた人は、三日くらい経過したところで情報局が迎えに来てくれる。

将来的には日本にも対外情報機関が必要だ。ただし、こういう国際スタンダードのインテリジェンスの世界に飛び込めるかどうかといえば、一足飛びには難しいと思います。

手嶋 実力相応なインテリジェンスを考えたほうがいいですね。ちなみに、インテリジェンスに必要な情報の九割は公開情報を読み解くことで得られる——これも佐藤ラスブーチンのテーゼですね。

佐藤 この話を証明する恰好の事例があります。東西冷戦下で西独・ミュンヘンを本拠に、ソ連・東欧向け放送を流していた「ラジオ・リバーティ（ソ連向け）／ラジオ・フリー・ヨーロッパ（東欧向け）」という放送局がありました。最初は西側諸国の宣伝放送で、

東側から亡命者が出ると、聞き取り調査をしてデータなどを集めているうちに、膨大なデータベースができてしまった。ですから、ここが出す週報は素晴らしかった。一時は、CIAやSISのレポートも顔負けといっているほど質の高い情報がかかれていた。公開情報の蓄積というものは、大化けするんです。

日本も対外情報機関を作るにしても、公開情報を読み解くところから始めればいいと思うんですよ。東大、京大、早、慶などで共同して情報センターなどを設立して、公開情報を読み解ける人材養成を始めれば、数年もすればその中からそうした人材が育ちます。そうやって、地道に国際レベルの専門家を養成することを目指したほうがいいように思います。

日本のインテリジェンスの現実

手嶋 そんな覚悟の欠如と論理の破綻が中間報告にはよく出ています。その

点では一種の傑作といっている。東京に在勤する諸外国のインテリジェンス・オフィサーが、これを翻訳して本国に報告するにはさぞ苦吟したことでしょう。

佐藤 「東洋の神秘」と思うでしょうね。我々とは明らかに違う論理で生きている。でも、何か、理屈があるはずだとして、日本に精通した人物が調査をおおせつかる。

手嶋 明晰な論理の欠落ほど彼らを苛むものはない。(笑)

佐藤 苦しみといえば、日本の外交官のインテリジェンス感覚の欠如ゆえに、今、ロシアのインテリジェンス関係者を苦しめている事実があります。

四月二十三日、エリツイン前ロシア大統領が逝去し、行われた葬儀の際に、日本は大失態を演じました。

外国の弔問に誰を派遣するかというのは、その国の歴史認識や政治的な問題意識が問われる重要な場面になるのです。エリツイン前大統領は、ソ連共

産全体主義体制を破壊し、自由、民主主義、市場経済を基本的価値観とするロシア連邦を作り出した政治家ですから、国葬には米国のクリントン前大統領、ブッシュ元大統領、英国のメージャー元首相ら、そうそうたるメンバーが参列したのはいうまでもありません。一方、日本はこの国葬に特使を出さなかった。世界から大騒動を買ったことはいうまでもありません。

手嶋 弔問外交という言葉もあるほど葬儀への対応は重要です。にもかかわらず、失態を犯してしまった。記者会見で、塩崎官房長官は「葬儀に間に合う商用便がなかった」と、事実関係を誤って釈明した。官邸への情報システムにほころびが出ているのです。

佐藤 この説明は、「お前の国は、政府専用機はもとより、チャーター便を出すのにも値しない」といっているのに等しい。ですから、なぜ、日本はロシアにケンカを売るのか、何のシグナルなのかと。この「事件」をめぐる、

僕はロシア側の政府関係者から、解釈を求められている。

手嶋 同じ頃、米国を訪れた麻生太郎外相は、対露重視の決断を下しました。イラク情勢の安定化を支援する主要八カ国（G8）と周辺国の外相によるエジプト会議に出席する前に、ワシントンからモスクワに直行し、イワノフ安全保障会議書記、ラブロフ外相らと会談しました。イラク情勢を最優先するブッシュ政権が「エジプト会合には初日から何としても出席してほしい」と、かなりのプレッシャーをかけてきたのですが、麻生外相は断固モスクワに飛んでいます。その一方で国葬ではこんな対応をとってしまう。このギャップをどう読み解けばよいのか。ロシア側のインテリジェンス関係者をさぞかし混乱させていることでしょう。難解な方程式を解かされているとロシア側は思ったでしょう。

佐藤 悩んだあげく、ロシア側では深読みが始まっている。新しい時代を切

り開こうとする麻生外相の対応は誠意があり、ウソもない。その一方で国葬には特使も送らない。ということは、官邸と麻生外相の間に温度差があるのではないかと。

ロシアとすれば、今の官邸の態度を見たほうがいいのか、それとも、力をつけつつある麻生外相を注視していたほうがいいのか、「佐藤、話を聞かせろ」ということになる。

僕は、「今の日本外務省が、戦略的にものを考える能力が足らず、ぼーっ」としているからだ」と率直に答えるのだけれど、信じない。

手嶋 そうでしょう。相手がプロであるほど深読みをするでしょうから。

佐藤 日本の弔問外交の失敗は、以前にもある。二〇〇五年に、バチカン市国で東西冷戦終結の立役者の一人として知られるローマ法王ヨハネ・パウロ二世の葬儀が行われた際、米国をはじめ、フランス、イランなど世界中が現役の国家元首を送り、アナン国連事務

総長も参列された。

この葬儀に、日本からは川口順子総理補佐官しか出席せず、大饗饗を買ったんです。世界中のプレスから袋叩きにされた。このたった二年前の教訓をなぜ、生かしきれなかったのか不思議でなりません。

手嶋 これは、インテリジェンス以前の問題です。

佐藤 政府のNSC構想の中には、外務省や公安警察、防衛省などの持っている秘密の情報を収集することばかりが書かれています。現状では、外務省が新聞のような公開情報すら読み解けていないことを露呈しました。インテリジェンスをいう前に、外務省職員がもっと緊張感を持って仕事をすべきだといっておきたい。

北朝鮮をめぐる無策

手嶋 対北朝鮮外交をめぐるでも、日本の情報収集・分析の未熟さが露呈しています。

なのです。

六カ国協議の米首席代表、クリストファー・ヒル国務次官補の発言は、カメレオンのように変わり続けています。その背景分析ができていない。二月十三日の合意では、北朝鮮は核放棄に向けた「初期段階の措置」をとうに実施していなければならない。期限の四月十四日はすでに過ぎ去っている。

ヒル国務次官補は「まもなくすべて決着する」と何度釈明したことでしょう。マカオの金融制裁を解除して黒い資金を返す詰めを怠っていたのです。その一方で「忍耐が必要だ」といい募っている。この「忍耐」とは、米国ではなく、実は日本に向けられたものです。こうした米国の行動を精緻に読み解くインテリジェンス報告が官邸に届いていません。

佐藤 マカオの「バンコ・デルタ・アジア（BDA）」の北朝鮮関連資金の全面凍結解除も認めてしまいました。要するに米国は、過剰なほどイランの暴発を恐れている。中東情勢で手一杯

手嶋 米国は決して認めようとしな本音。それは、北朝鮮から中東への核兵器・核技術の拡散は、断じて許さない。だが、北朝鮮の核保有はいま程度なら見逃してもいい——こう思い始めている節がある。そうでなければヒル国務次官補のずさんな交渉は説明がつかねます。そして、北朝鮮はそんな米国の足元を冷たく見ている。

佐藤 米国は同盟国の日本に対し、率直に本音を言っしてほしいですよ。

「第三次世界大戦を食い止めることが先だ」と。また、それなら、日本にできることはあるはず。日本と中東諸国の関係は比較的良好なものですから。もし、僕が情報操作を担当しているなら、中東某国あたりと組んで、「どう

も北朝鮮は米国のことを軽く見て、イランに核技術と核兵器を流そうとしているようだ。気をつけたほうがいい。中国はあてにならない」という情報を流すでしょうね。そうすれば、米国の

対北朝鮮外交だつて変わってくるかもしれない。深い川を越えるかもしれない。しかし、そうした力は今の日本にはないようです。

手嶋 「イラン」と「核拡散」というブッシュ政権にとって悪夢というべき二つのファクターを組み合わせて、ブッシュ政権に警告を発する。そしてイラク戦争で躓いてしまったアメリカ外交をあるべき軌道に戻す。こうしたラスプーチンの処方箋を支持します。

「情報を権力から遠ざけよ」という原則に照らせば、かなりの癪球といえますが、かくまで迷走を続ける超大国アメリカを見捨てておくわけにはいきません。ブッシュ政権の対東アジア戦略を立て直すために日本は新たな布石を打つべきでしょう。

佐藤 安倍首相が進める価値観外交に、今手嶋さんが述べた具体的内容を組み込むのです。そうすれば状況は日本に有利な方向に変化します。

（撮影・和田直樹）